

## 入学式式辞

春の息吹を感じる今日の良き日、多くのご来賓の皆様、保護者の皆様をお迎えして、兵庫県立高砂南高等学校第38回入学式を盛大かつ厳粛に挙行できますことは、本校にとりまして、この上ない慶びとするところであり、ご臨席を賜りました皆様に、高いところからではあります、職員を代表して、心からお礼申し上げます。

先ほど入学を許可された280名の生徒の皆さん、入学おめでとうございます。新しい制服を身にまとったお子様の凛々しい姿を見て、保護者の皆様の感慨も、ひとしおのものと同様申し上げます。

本校は、昭和55年に開校し、今年で38年目を迎える学校であり、これまで、多数の素晴らしい人材を輩出して参りました。「自主自立 質実剛健 友愛協調」を校訓に掲げ、生徒一人ひとりが勉強、部活動に、積極的に取り組み充実した学校生活を送っています。

さて、いよいよ本日からは、それぞれの夢の実現に向けた生活が始まります。心の準備はできていますか。

先日、昨年のプロ野球で日本一を成し遂げた日本ハムファイターズの栗山監督が書いた「栗山魂」という本を読みました。その内容に、強く共感したので、お話をさせていただきたいと思います。

栗山さんは、小学校一年から野球チームに所属し、監督であったお父さんから厳しく指導を受けました。将来の夢は、プロ野球選手。それを見事に実現しました。これだけの話なら、単なるサクセスストーリーといったところですが、実際は、プロ野球選手としては、決して大きな体でない上に、甲子園に出場したことの無い高校、国立大学への進学と、プロを目指す多くの選手とは違った道を歩みました。ですからプロ野球選手になること自体、ものすごく大変な道のりでした。しかし、プロに入ってから生活はさらに過酷で、人生で最も大きな挫折を経験しました。同じ年に入団したチームメイトは有名な選手ばかり、栗山さんは技術的に未熟な上に、精神的な落ち込みはとて大きかったそうです。

そんな中でも、プロ野球選手として7年間、1989年にはゴールデングラブ賞を受賞するまでに成長しました。また、監督となって5年目の昨年のペナントレースは、6月時点で11.5ゲーム差をつけられたにもかかわらず、逆転優勝し、日本一にも導きました。

この本の中に、私は3つの大切なことが書かれていると思いました。皆さんには、是非参考にして、これからの生活に活かして欲しいと思います。1つ目は、「夢や志を実現するための心構えの大切さ」。2つ目は、「人との出会いの大切さ」。3つ目は、「感謝の気持ちの大切さ」です。

1つ目の話です。栗山さんは、いかにして夢を実現したのでしょうか。

私は、高い志を持ち、可能性を信じて挑戦した。そしてそれをあきらめずに挑戦し続けたことが実現の源だと思いました。

栗山さんは言っています。「やらないと、成功も失敗もない」「少しでもあきらめたら、可能性は100%ない」と。まずは挑戦することから始まったと言えます。そして、「嫌なこと、苦しいことは、実は自分が変わるチャンス。苦しめないと思えば生まれやすい」とも言っています。これから先、皆さんの前に、苦しいこと、困難に見えることが立ちまわることが必ずあります。それをプラスにできるかどうかを決めるのは、誰でもありません、皆さん自身なのです。

まずは、これからの3年間、言い訳をせず、逃げずに、自分を信じて夢や志を追いかけてください。

2つ目の「人との出会いの大切さ」についての話です。

栗山さんは、人生の分岐点で、たくさんの人と出会い、大きな影響を受けて成長しま

した。国立大学のため実績がなく、プロ入りは難しいかなと感じていた頃、たまたま練習試合を見ていたプロ野球解説者の佐々木信也さんに「キミなら、プロ野球でやっても面白いかもしれないね。」と言われて、プロでやりたいという気持ちに再び灯がともりました。

プロ野球に入り、挫折を経験した栗山さんに声をかけたのは内藤二軍監督でした。「お前が人間としてどれだけ大きくなれるのかの方が、オレにはよっぽど大事なんだ。だから周りがどう思おうと関係ない。明日の練習で今日よりほんの少しでも上手くなってくれたら、オレは満足なんだよ。他の選手と比べるな。」

栗山さんは言っています。「人生の分岐点で、僕は幸運な出会いに恵まれました。そこには、必然の幸運と偶然の幸運があったと思います。目標に向かって努力している時に、道標を与えてくれる人、手を差し伸べてくれる人が、目の前に現れてくれたのです。どうして必然の幸運が訪れるのか。あえて言うなら『徳』です。人のためにどれだけ尽くせるか、が問われていると思います。」

この言葉を、どのように感じましたか。私は、夢に向かって努力し続ける人には、必ず手を差し伸べる人が現れる。そして、その人との出会いを大切にして努力し続けることが、夢をつかみ取る原動力になると確信させてくれました。皆さんには、さらに栗山さんが幸運をたぐり寄せたという「人のためにどれだけ尽くせるか」という姿勢をいつも意識して生活して欲しいと強く思います。

3つ目の「感謝の気持ち」についての話です。

栗山さんは、メニエール病という病気と闘いながらプロ野球生活を続けました。めまみや難聴、耳鳴りを伴う耳の内耳の障害です。初めて症状が出た時、野球の神様を恨み、「なぜ自分に病が。あまりにも不平等ではないか」と嘆きました。しかし、病院にはもっと深刻な病気の子どもたちがいました。残された命が短いにもかかわらず、毎日を精一杯に生きる子どもたちの姿に力をもらいました。

また、病気で苦しんでいる時、お母さんがポツリと漏らした「かわいそうで、かわいそうで、代われるものなら代わってあげたい」という言葉に、自分だけが苦しんでいるわけではなく、家族や、お世話になった人たちも心配してくれていることに気づきました。その人たちに感謝の気持ちを持つことができたからこそ、病を克服できたのだと思いました。

さらに、先ほどお話ししましたが、節目節目で尊敬できる人たちと出会い、アドバイスを素直に聞き入れ実行しました。それは、感謝の気持ちがあったからこそできたのではないのでしょうか。皆さんには、互いの心と心をつないでくれる「ありがとう」という思い、言葉を、常に意識して生活して欲しいと思います。

さあ皆さん、高砂南高校での3年間が始まります。これだという何かに挑戦してください。高い目標をもって挑戦し続けてください。そして感謝の気持ちを表して、友だちや先生との素晴らしい巡り会いをしてください。皆さんの頑張りを楽しみにしています。

最後になりましたが、保護者の皆様へ一言ご挨拶申し上げます。私たち教職員は、地域に愛され、地域の期待に応える学校づくりを行うという情熱を持ち続け、お子様が、自らの生きる道を、自らが切り開いていけるように、全力でサポートして参ります。そのお子様の健全な成長には、家庭と学校とが緊密に連携を図りながら、一体となって取り組んでいくことが重要であります。どうか、本校の教育方針をご理解いただき、ご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

活力ある本校で、明るく充実した高校生活を送られますことを心から期待して、式辞といたします。

平成 29 年 4 月 10 日

兵庫県立高砂南高等学校長 三谷 暁男